学年 5年　単元 けがの防止　関連する主な教科 社会

けがの手当

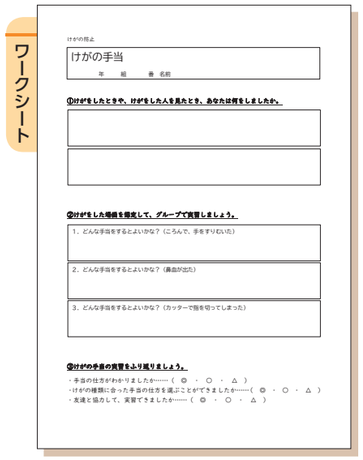
本時の目標　けがをしたときに、速やかに処置をすることや近くの大人に知らせることの大切さを理解するとともに、実習を通して簡単なけがの手当ができるようになる。

▶本時の展開

学習活動	■教師の主な発問 ◆予想される児童の反応等	●指導上の支援・留意点 ◎評価等
1 転んで擦りむいた、公園で遊んでいる時に友達が転んで頭を打った、などの場面を提示し、どんな対処をしたか（どんな対処をすると思うか）について、ワークシートに書き出し、その後、グループ内で発表し合う。 そのうえで、グループごとに出た対処や意見などを発表するなどし、板書して整理する。	■次（提示した場面）のようなことがあったとき、あなたは何をしましたか。または、どうしますか。 ◆びっくりして何もできなかった、学校で転んだ時は保健室に行った、近くにある水道できず口を洗った、どうしていいかわからない。　など	●教科書や教材にある、けがをした場面を２つ（自分のけが、目の前で起きた他者のけが）提示する。 ●①落ち着いた対処や周囲の危険の確認など、状況判断に関わること、②近くに助けてくれる大人がいないか、誰かに伝えられないかなど、通報に関わること、③どんなけがが起きていて、どんな対処が必要かなど、けがの手当に関わること、などに分けて整理する。
2 自分では手当ができなさそうな、頭を打った、意識がない場合などの対処について考える。	■頭を打って倒れてしまったような時は、どうすればいいと思いますか？ ◆救急車を呼ぶ。近くの大人の人に伝える。	●大きなけがの手当は、子供だけで対処しようとせず、できるだけ動かさずに、すぐに近くの大人に知らせたり、救急車を呼んだりすることを確認したうえで、練習を行う。
3 ２～３人一組になって、救急の通報の仕方を練習する。	■では、救急車を呼ぶとき、どうするか練習してみましょう。	●いくつかシナリオを用意しておき、通報する人、通報を受ける人、練習をチェックする人などを交代で行う。 ●社会科３年「安全なくらしを守る働き」で学習したことを思い出すとよい。 ◎速やかに処置をすることや近くの大人に知らせることの大切さについて理解したことを、言ったり、書いたりしている。
4 資料をもとに、AED とそれを用いた手当があることを知る。	■声をかけても応えないような、意識のないときには、AED を用いた手当を用いたことがあります。	● AED についての資料を読ませる。
5 擦りきず、切りきず、鼻血、捻挫などの簡単な手当の練習をする。	■手当ステーションを回って、いろいろなけがの手当の練習をしましょう。 ■友達と教え合ったり、見合ったりしながら練習しましょう。難しかったことや、「こうするとうまくできた」といったことを、ワークシートに書いておきましょう。	●３～５のきずの手当の実習場所（ステーション）をつくり、３～４人１グループで、実習場所を巡回する。１か所につき３～５分とする。 ●各ステーションでは、該当の手当を示した紙を貼っておく、手当の動画を見られるように準備しておくなどする。 ●可能であれば、養護教諭にサポートをお願いする。 ◎それぞれのけがの手当の要点を押さえ、簡単な応急手当ができている。
6 熱中症の手当について確認する。（発展的な学習内容）	■みなさんの年齢でおきやすい熱中症の手当についても知っておきましょう。	●熱中症に関する資料を確認する。

実習　自分でできるけがの手当の練習

▶活動時の資料



ワークシート

手当カード❶

手当カード❷

使用教材・準備物、留意事項など

- ●可能であれば、養護教諭とのティーム・ティーチングで実施する。
- ●グループごとにまとまった座席配置とする。実習のときには、そのうちのいくつかを手当ステーションとする。
- ●手当カードまたは掲示資料を各手当ステーションに配置する。手当動画を参照させる場合は、リンク先二次元コードをカードや掲示資料に記載しておく。
- ●手当実習に包帯などの用具を用いる場合は、事前にステーションの近くに準備しておく。

学年 5年　単元 けがの防止　関連する主な教科 特別活動

けがの発生

単元の目標

○けがの防止について理解できるようにするとともに、けがが発生したときには、その症状の悪化を防ぐために速やかに手当ができるようにする。
・交通事故や身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがの防止には、周囲の危険に気付くこと、的確な判断の下に安全に行動すること、環境を安全に整えることが必要であること。
・けがなどの簡単な手当は、速やかに行う必要があること。
○けがを防止するために、危険の予測や回避の方法を考え、それらを表現できるようにする。
○交通事故やけが、犯罪被害の防止のための工夫や努力について、進んで調べることができるようにする。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①交通事故や身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがの防止には、周囲の危険に気付くことや、的確な判断の下に安全に行動したり、環境を安全に整えたりすることが必要であることを理解している。 ②けがの悪化を防ぐ対処として、けがの種類や程度などの状況を速やかに把握して処置することが大切であることや、自らできる簡単な手当の方法を理解しているとともに、技能を身に付けている。	①けがの防止に関わる事象から課題を見付け、危険の予測や回避をしたり、けがを手当てしたりする方法を考え、それらを発表したり、ワークシートに書いたりして伝えている。 ②けがの防止について、けがや症状の悪化の防止のために考えたり、選んだりした方法がなぜ適切であるか、理由をあげてワークシートに書いたり、友達に説明したりしている。	①学校や地域などにおける、交通事故やけが、犯罪被害などの防止のための工夫や努力には、どのようなものがあるか進んで調べようとしている。

▶単元の指導計画例

［指導のポイント★手立て ！配慮事項【教科名】関連教科

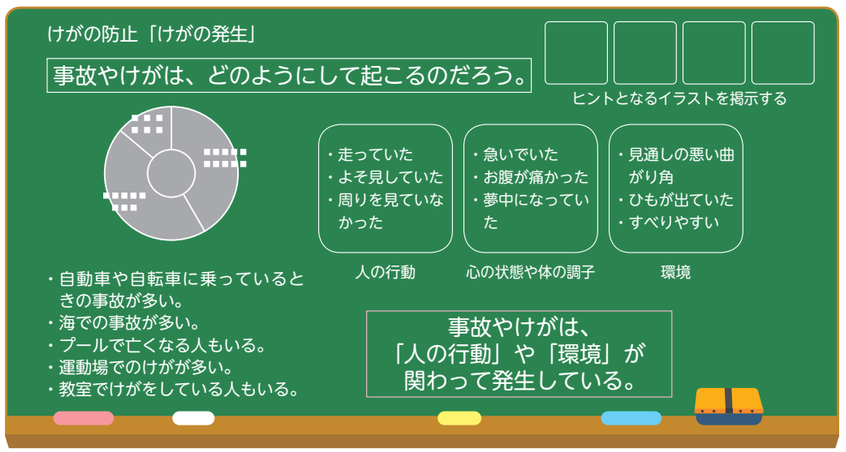
時	○主な学習活動	指導のポイント	評価
1 本時	「けがの発生」 ○多くの交通事故や水の事故が発生し、けがをする人や死亡する人が少なくないこと、また、学校生活での事故や犯罪被害が発生していることを理解する。 ○事故やけがは、「人の行動」や「周りの環境」が原因で起こることを理解する。	★資料から事故がいつ、どこで起きているかを読み取れるようにする。 ！けがや事故の体験発表は無理の無い範囲で行う。	知①
2	「交通事故の防止」 ○交通事故を防ぐためには、周囲の状況をよく見て早めに危険に気付き、適切な判断をして行動することが必要であることを理解する。 ○交通事故の防止には、危険な場所の点検などを通して、施設・設備を安全に整えるなど、安全な環境をつくることが必要であることを理解する。	★絵から予想される危険を、ブレインストーミング等で、出し合うようにする。 ！「内輪差」「死角」は確実に押さえる。	知①
3	「学校や地域でのけがの防止」 ○学校や地域での事故・犯罪を防ぐためには、決まりを守るとともに、周囲の状況をよく見て早めに危険に気付き、適切な判断をして行動することが必要であることを理解する。 ○学校や地域での事故や犯罪の防止には、危険な場所の点検などを通して、施設・設備を安全に整えるなど、安全な環境をつくることが必要であることを理解する。	★事例や身近な体験談から、犯罪に巻き込まれそうになった場面をイメージしやすくする。 【社会】地域の安全を守る働き	知①
4	「もっと知りたい・調べたい」 ○自然災害による被害を調べ、実際に自然災害が起きた時にどのように対処するのかを考える。 ○日ごろからの備えについて家族で話し合ったり、自分たちの地域の避難場所について確認したりする。	★資料から自分たちの命を守るための対処方法を考えられるようにする。 【総合】地域の風水害 【理科】流れる水のはたらき 【社会】自然災害から人々を守る働き	思① 態①
5	「けがの手当」 ○けがをしたときやけが人が出たときに、どのように対処したらよいのかについて考える。 ○実習を通して、擦りきずや切りきず、鼻血、やけど、捻挫、打撲などの簡単な手当ができる。	★可能な限り、養護教諭のサポートを得て、数人のグループになって、それぞれのけがの手当の要点を押さえ、簡単な応急手当を実習する。	知② 思②

▶本時の展開例

本時の目標　事故やけがは、「人の行動」や「周りの環境」が原因で起こることを理解し、けがの防止への意識を高めることができる。

学習内容と活動	○支援・留意点	評価
1. 資料「交通事故、水難事故、学校事故のグラフ」から小学生の事故やけがの現状を知る。 ・運動場でけがが一番多いと思う。 ・学校で多くの人がけがをしているな。 2. 去年起きた自校のけがの状況を知らせる。	・資料を参考に、それぞれの事故がどんなときにどのような場所で起こっているかを読み取るようにする。 ・事故やけが以外にも、犯罪の被害が起こっていることを知らせる。 ・１年間に約２千件のけがが起こっていることを知り、けがを防ぐという学習課題に対する意欲がもてるようにする。	
事故やけがは、どのようにして起こるのだろう。		
3. 事前アンケートのけがや事故の体験やヒヤリとした体験例から、けがの原因について話し合い、けがの原因を分類する。 ・廊下を走っていると、かぎ型廊下でぶつかってしまった。 ⇒見通しが悪いところだったから。 ⇒走っていたから。 ・通用門を飛び出して、門の外の歩行者とぶつかった。 ⇒飛び出してしまった。 ・鬼ごっこをしているときに低学年とぶつかって転んでしまった。 ⇒後ろを見ながら走っていた。 ⇒ドッジボールをしている所を横切ってしまった。	○自分たちの事故やけがの体験から考えることで、けがの原因について考える意欲を喚起するようにする。 ○「事例カード」を用いて話し合うことで、積極的に意見が出せるようにする。 ・けがの原因は、主として「人の行動」と「環境」に分けられることに気付けるようにする。 ・「人の行動」には「心の状態や体の調子」が関係していることについては、触れる程度とする。	
4. 活用問題に取り組み、なぜ事故が起こったのか考える。 ・一時停止をしなかった。「人の行動」 ・暗い、見通しの悪い交差点。「環境」 ・急いでいた。「心の状態や体の調子」	・学習した「人の行動」「環境」の２つの視点で考えられるようにする。	【知識・技能①】 交通事故や身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがの防止には、周囲の危険に気付くこと、的確な判断の下に安全に行動することが必要であることを理解している。（ワークシート）
5. 本時の学習を振り返る。	・本時で学習したことや今後どう生かしていきたいか自分の意見や考えを伝えるようにする。	

▶板書計画



学年 4年　関連する主な教科 社会

まちの中にひそむ危険

本時の目標　安全だと思う場所でも「入りやすく、見えにくい」場所という視点で見ると、危険が潜んでいることに気付き、危険を避けるための行動について考えることができる。

本時の位置付け　今回の授業では、町の中での安全に目を向け、安全だと思う場所にも視点を変えると危険が潜んでいることや、同じ場所でも昼間と夜間では安全性が異なることに気付かせ、事件や事故にあいにくい環境を選ぶ力を身に付けさせたい。

▶本時の展開例

過程	○主な学習活動	◎支援・留意点 ■評価（評価方法）
導入	○これまでの学習を想起し、本時の学習のねらいを確認する。 ・資料を見て、安全だと思っている場所にも「入りやすく、見えにくい」場所があることに気付く。 まちの中にひそむ危険について考えよう　～「入りやすく、見えにくい」場所を探そう～	◎「地域安全マップ作り」や「事件・事故０のまち」での学習から、「入りやすく、見えにくい」場所が危険な場所であったことを思い出せるようにする。
展開	○公園、マンション、道路の写真を見て、それぞれの場所に潜む危険について考える。 ・マンションの入り口は明るいから安全そうだけど、奥に行くと外から見えにくくなるから危険だと思う。 ・公園のトイレの建物の裏は周りから見えにくいから危険だと思う。 ・昼間は明るいから人もたくさんいるけど、暗くなったら人が少なくなっているからちょっと怖い。 ○グループで意見を出し合い、危険を減らす方法について話し合う。 ・暗くなっても街灯があるところを通れば、何かあっても周りから見えやすい。 ・周りから見えにくいところには行かない。 ・どうしても行かなくてはいけないときは、一人で行かず友達や大人といっしょに行く。	◎それぞれの場所の昼と夜の写真、全体の写真、危険が潜んでいそうな写真を用意して児童に提示する。 ◎グループごとに違う場所について考えられるようにする。 ◎自分の考えを出してから、グループでの話し合いに参加できるよう個人学習の時間を十分確保する。（考えはワークシートに書かせる。） ◎グループで意見を出し合うことにより、意見の交流をしてさまざまな意見があることに気付けるようにする。 ◎安全な場所に潜む危険に気付くことで、どうしたらその危険を減らせるのかを話し合えるようにする。
まとめ	○本時の学習を振り返る。 ・本時の学習から、地域で過ごすときにどのようなことに注意しようと思ったかなど学習感想を書く。	■安全だと思っていた場所でも「入りやすく、見えにくい」場所という視点で見たり、状況が変わったりすると危険が潜んでいることに気付き、危険を避けるために注意しようとする意識をもつことができたか。（ワークシート）

▶本時における評価の視点

・安全だと思っていた場所でも、「入りやすく、見えにくい」場所という視点で見たり、状況が変わったりすると危険が潜んでいることに気付き、危険を避けるためにどのように行動すればよいか理解することができたか。

使用教材・準備物、留意事項など

●教材

【写真資料の提示】
これまで学習してきた「安全な場所」（公園やマンションなど）の写真を準備し、その中に潜む危険について実際の様子を見ながら考えさせる。

●日常的な安全指導「定期的な安全指導」「特設する安全学習」などとの関連

・校外地域学習などを行う際に、歩道や横断歩道の歩き方などについて、繰り返し一斉指導を行った。安全指導日に集団下校を行い、安全な登下校の仕方について指導をしたりする。

学年 3・4年　関連する主な教科 社会

安全マップをアップデートしよう―安全に生活を送るために―

単元の目標

生活安全についての知識を付けながら危機回避能力を高め、先制・予防的活動ができるようにしていく。児童が安全な行動をとるために自ら考え判断し、安全に生活を送っていくことができるようにする。

単元の評価規準

観点	よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
評価規準	自らの身を守るための基本的な対応の改善に向けて取り組むことの意義を理解し、自分たちが安全に生活を送るための知識や行動の仕方を身に付け、協力してくれている人たちがいることを理解している。	身近に起こるかもしれない危険に気付き、その危険を回避する方法などについて話し合い、安全マップを改善するとともに、自分にできることを意思決定して実践している。	自分の生活をよりよくするために、生活安全について振り返りながら、意欲的に危険を回避する方法や自分にできることを考え、みんなと協力してよりよい人間関係をつくろうとしている。

▶単元の指導計画例

	学習活動	単元の取り扱い
一次	不審者対応避難訓練	学校行事（1）
	通学路での安全な対応を知る	学級活動（2）
	地域にある危険な場所などを調べる	
二次	地域の安全・危険な場所探し、発表練習	学級活動（2）
	安全マップチェック（本時）	
三次	フィールドワーク	学校行事（2）
	安全マップ編集・改善	

▶本時の展開例

本時の目標

安全マップの改善点を見つけ、自分にできることを考えることができる。【集団や社会の形成者としての思考・判断・表現】

●授業構成

	学習活動	指導上の留意点	評価
事前活動	①不審者対応避難訓練に参加し、避難後自らの訓練状況について振り返る。 ②自分たちの身を守るための基本的な対応について知る。 ③地域にある安全な場所と危険な場所について調べる。	・音を立てないこと、先生の指示に従い行動することなどについて確認する。 ・「いかのおすし」「いいゆだな」について確認する。 ※次ページの「板書計画」を参照 ・生活安全の観点で、地区別グループに分かれて写真を撮る。 ・各グループでまとめ、発表の練習をする。	☆登下校時の危険回避における基本的な知識や対応の仕方を身に付ける。【知識・技能】 ☆危険な場面、危険な場所、危険な状況についての知識や行動の仕方を身に付ける。【知識・技能】

	学習活動	主な発問（◆） 予想される児童の反応（◇）	指導上の留意点（◎） 評価のポイント（☆）
導入（10分）	1. 前時の振り返りをする。	◆安全に生活するためには、どのようなことに気を付ければよいですか。 ◇「いかのおすし」 ◇「いいゆだな」 ◇暗くなる前に友達と帰る。 ◇できるだけ通学路を通る。	
	2. 地域の写真を見せて、安全な場所と危険な場所に分類する。	◆みんなが住んでいる地域の写真です。安全な場所と危険な場所に仲間分けしてみましょう。 ◇人がよく集まる場所なので、Aグループです。 ◇人通りが少ない暗い場所なので、Bグループです。 ◇今は大丈夫だけど、夜になったら危ないかもしれません。	
	安全マップをアップデートするために、改善ポイントを見つけよう。		
展開（30分）	3. 安全マップを見ながら、グループごとに調べてきた危険な場所と安全な場所を発表する。 ・4グループが発表 ①地域A ②地域B ③地域C ④地域D	◆グループごとに調べてきた危険な場所と、安全な場所を発表してください。 ◇Q.この場所は安全だと思いますか？危険だと思いますか？ ◇A.この公園は、人がいつもいて夜になっても街灯がたくさんついているから安全だと考えました。	◎既存の自校の安全マップを活用する。
	4. 改善ポイントについて確認する。	◆意見や質問はありませんか。 ◆前に作った地図をもう一度見てください。今度フィールドワークに行くときに、どんなことを注意して見ていけばよいでしょうか。	☆生活安全の観点で安全マップの改善点を見つけ、自分にできることを考えている。【思考・判断・表現】
	安全マップを改善するためにチェックするポイントは、 ①人通りの少ない場所 ②昼間でも暗い場所や、夜に街灯が無い場所 ③「子ども110ばんの家」などの助けてくれそうな場所		
まとめ（5分）	5. 今日の授業を振り返り、これから自分にできることを書く。	◆今日の学習での振り返りを書いてください。	◎次回予告で、全校で行うフィールドワークに意識が向くよう促す。

▶板書計画

安全に生活するために

・登下校のあいことば
「いか」ない
「の」らない
「お」おごえを出す
「す」ぐににげる
「し」らせる

・るすばんのあいことば
「い」えのかぎを見せない
「い」えのまわりを見る
「ゆ」うびん受けを片付ける
「だ」れもいなくてもただいま
「な」かに入ってすぐにかぎをかける

・暗くなる前に家に帰る。
・できるだけ通学路を通る。

●グループ分け
Aグループ　Bグループ

めあて

安全マップをアップデートするために、改善ポイントを見つけよう。

○危険な理由　○安全な理由

まとめ

安全マップを改善するためにチェックするポイントは、
①人通りの少ない場所
②昼間でも暗い場所や、夜に街灯が無い場所
③「子ども110ばんの家」などの助けてくれそうな場所

振り返り

○これから自分にできること

電子黒板
(写真)

地図

地図

地図

地図

学年 6年　関連する主な教科 学級活動、体育、道徳、国語、生活

みんなの命を守り隊

単元の目標

身近な地域を安全という視点から見つめ直すことで課題を見付け、地域のさまざまな人と関わったり、地域の交通事情を調査したりする活動を通して、仲間と協力しながら主体的・協同的に課題を解決しようとするとともに、交通安全に対する理解を深め、自分のできることを考えようとする。

単元の評価規準

学習方法に関すること	自分自身に関すること	他者や社会との関わりに関すること
身近な地域の安全について、自ら課題を見付け、情報収集を進んで行うなど見通しをもって解決している。	身近な地域の交通事情を理解することで、自身の交通マナーを見直すとともに、最高学年として、地域から交通事故が発生しないよう、自分ができることを考えている。	地域の人々から話を聞いたり、校区内の調査をしたりしたことを仲間と協力してまとめ、それらをいかして他学年の児童にも分かりやすく発信している。

【評価方法】
●学習活動全体…振り返りカード（自己評価、自由記述含）、学習の様子を観察
●学習活動２・４・５…制作物による評価（スライド、劇やペープサート、模造紙や画用紙の作品）
●学習活動６…レポートや作文

▶指導計画・関連する教科等とのつながり

時間数	活動内容	関連する教科等と学習指導要領
2	身近な地域で起こり得る交通事故を考える	学級活動（２）ウ、体育科Ｇ（２）アイ
4	危険予測マップを作ろう	体育科Ｇ（２）アイ、道徳科Ａ３、D19
10	交通事故の事例を調べてまとめよう	国語科１（２）イ、国語科２Ｂ（１）アエ
2	交通安全について語り合おう	国語科２Ａ（１）アイウエ（２）アイ
2	交通安全教室を開こう	学級活動（３）アイ、生活科（１）
2	学習のまとめ	学級活動（２）ウ（３）アイ

▶展開例

過程	学習活動	教師の支援・指導上の留意点
1・2時間目(導入)	1．身近な地域で起こり得る交通事故について考える。 ◇登下校中に起きることが予想される交通事故にはどんなものがあるか。 ◇交通事故が起きそうな場所とはどんな場所なのか、危険箇所を探す視点を知ろう。	○身近な場所で起こり得る交通事故について考えられるようにするため、危険予知トレーニングの資料を準備し、スライドにまとめて提示する。 ○登下校中の様子や通学路の写真をスライドにまとめることで、自分たちのこととして実感できるように提示する。また、交通事故の危険が予想される場所を探すための具体的な視点を提示する。その際、後述の教材を利用すると分かりやすい。
3~6時間目	2．危険予測マップを作ろう。 ◇通学路や校区の危険個所を探し、そこで予想される事故について考え、地図上に表す。	○登下校の際、導入で学んだ視点をもとに危険箇所を見付けたり、デジタルカメラで撮影したりするよう伝える。 ○保護者や地域の人に、日ごろ危険だと感じている場所やその内容についてインタビューする機会を設けておきたい。 ○危険予測マップ作成や事故事例の調査、安全教室の準備を進めるために、地区ごとにグループを作る。
7~16時間目	3．交通事故の原因や事例を調べて、まとめよう。 ◇交通事故の原因や被害状況、実際の事故事例を調べる活動を通して、それを整理したり、事故を防ぐための方法を考えたりする。 ◇交通安全教室等で学習の成果を発表するため、聞き手の対象に合わせた発表方法を自分たちで選び、報告できるような準備をする。	○グループで出し合った危険箇所や予測をもとに、実際の事故事例や被害状況、事故の原因、事故後の対処などについて調べる。 ○学習活動１～３で行ったインタビューや調べたことを目的や意図に応じて整理したり、図やグラフなどを用いたりして、画用紙やスライドにまとめ発表する機会をつくる。自分たちができる対策、地域の方へのお願いを交えるなど指導する。 ○学習活動４及び５を、学習の成果を見せる場として扱う。発表方法としては、劇やペープサート、危険予測クイズ、スライドによる紹介など、聞く対象に合わせて選択する。
17~18時間目	4．交通安全について語り合おう。 ◇地域の方や保護者、警察の方を招き、通学区の交通の現状や事故を防ぐ対策について、児童が発表したり、参加者どうしで意見交換をしたりする。	○意見交換会は、児童・参加者が交流できるようグルーピングに配慮する。 ○保護者やPTA役員、登下校の見守りをする方、警察の方などを招く。
19~20時間目	5．交通安全教室を開こう。 ◇通学路の危険箇所や事故事例等について調べたことをもとにして、校内の児童に交通安全を呼びかける活動をする。	○低学年向けや全校児童向けの交通安全教室を開催する。この際、聞く側の学年を意識し、表現の仕方を工夫するよう指導する。 （例１）１～３年の各学級や各学年に６年生数名がそれぞれ出向いて行う。 （例２）全校朝会や集会等で行う。 （例３）異学年の縦割りグループ活動において、６年生が１～５年生を対象に行う。
21~22時間目(終末)	6．学習のまとめ（振り返り） ◇交通安全の学習を通して、自分が身に付けたことを振り返り、安全に対する意識の変化や今後の在り方を考える。	○学習を通じて分かったことや気付いたこと、自分が交通安全を推進する一人としての自覚をもつことができたかを評価し、今後の学校生活につなげようとする。

使用教材・準備物、留意事項など

●教材
児童の安全な通学のための教育教材【DVD】
（下記URLからも動画をダウンロードできる）
「安全に通学しよう　～自分で身を守る、みんなで守る～」
（企画：文部科学省 平成25年３月）
https://anzenkyouiku.mext.go.jp/mextshiryou/dvd_tsuugaku_s.html

学年 1年

あんぜんだいさくせん―じどうしゃとひと―

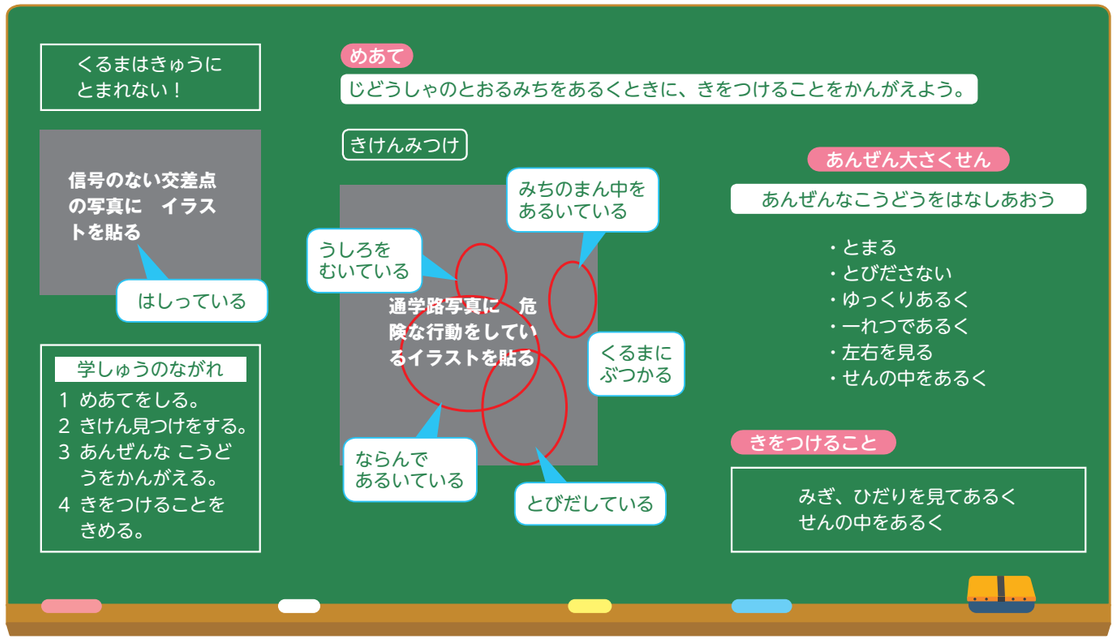
本時の目標 自動車は急には止まれないことを知り、自転車の通る道での安全な歩き方を考える。

▶本時の展開例

※評価の視点等…集団や社会の形成者としての思考・判断・表現

学習内容と活動	○支援・留意点	評価
1. 自動車事故データの結果から、本時の学習課題をつかむ。	○自動車は、急に止まれないことを動画で伝えたり、1年生の自動車事故が最も多いことを示したり自動車の通る道を歩いているときにヒヤッとした経験を思い出したりすることで、本時のめあてを意識できるようにする。 じどうしゃのとおるみちをあるくときに、きをつけることをかんがえよう。	
2. 写真を見て、危険見付けをする。 ・一人学び 通学路の写真を活用する ・全体交流	○危険の見付け方やワークシートの書き方を確認するために、正門前の危険見付けを全員で行う。 ○実際の通学路の写真を使用することで、実生活に基づいて考えやすくする。 ○危険な行動を見付けやすくするために、写真とイラストの資料を準備する。 ・自分で危険な行動を見付け、ワークシートに書く。 ・見付けた危険を全体で交流し、同じ考えや違う考えを伝え合う。 ・児童の発言を「危険な行動」と「危険予測」で色分けして板書する。 ○安全な行動について話し合えるような話型を提示し、話し方のモデルを見せる。 ○発表の際、人物が混同しないようにイラストの人物に服の色・柄など分かりやすい特徴をもたせておく 。	
3. 予測した事故が起こらないようにするために気をつけることを考える。 ・二人学び ・全体交流	○意見を板書に残すことで、自分の目標を考える時にいかしていけるようにする。 ・だれが、どのような行動をすればよいかが分かるように、板書に人物イラストを用いる。 ・「～しない。」という否定的な考えにならないように、「～する。」という肯定的な言葉で示すようにする。	
4. 本時の学習内容をもとに、これまでの自分の行動を振り返り、今後の行動の目標を立てて発表する。	○飛び出してきた子がひかれそうになる動画を紹介し、飛び出しの恐さを感じさせることで決めた目標を守ろうという意識を高める 。 ○それぞれのめあてを交流し、今後の自分の自動車の通る道での歩き方にいかすようにする。	自動車の通る道での安全な歩き方を考えている。 【思・判・表】 （ワークシート・発表）

▶板書計画



●事前の取組と事後の取組について

〈事前の取組〉

事前に通学路の歩き方や信号のある交差点の渡り方を学習しておくとよい。本時に入る前には、登下校中の歩き方についてのアンケートを実施し、実態をつかむ。

【登下校中の歩き方アンケート】

1. 歩道から飛び出しませんでしたか。いいえ
2. 横断歩道は、手を挙げて渡っていますか。いいえ
3. 友達と１列で歩いていますか。いいえ

〈事後の取組〉

授業の最後に決めためあてを実践できたかどうか、一週間、帰りの会で振り返るようにする。自分のめあてを毎日の予定表に添付しておき、自分で頑張ろうとしたことを続けることができるように常に意識させることで実践につなげる。また、授業の様子やその後の振り返りの様子を学年便りで紹介し、子どもたちの取組を家庭にも伝え、家族で安全な歩き方について考える機会をつくる。

さらに、地域の運送会社の方などをゲストティーチャーとして招き、実際の自動車を使って死角や自動車がブレーキを踏んでからどれだけ走ってしまうかについての学習を計画する。本時で学習したことを実際に体験することで、より「目標を守ろう。」という意欲を高められるようにする。

地域と連携・協働して取り組む交通安全教室の展開例

▶本時の展開例

本時の目標

通学の安全を確保するために必要な基本的知識と技能を身に付けさせるとともに、安全にかかわる意識の高揚を図る。

【重点】ルールを守ることを意識させる。特に飛び出しは絶対にしないという意識を持たせる。

活動内容

【1・2年生】体育館にて、踏切や遮断機のしくみ、渡り方を学ぶ。

▶展開例（1・2年生）

【1・2年生の当日の動き】

※業前　マイク準備（視聴覚部）

時刻	内容
~9：35	体育館に整列。 ※事前にトイレを済ませ、ヘルメットをかぶる。
9：40~	開会行事（進行：安全行事部） ①開会の言葉 ②校長先生の話 ③講師の先生の紹介 （鉄道会社の担当者・地元大学の先生） ④訓練内容の説明
9：45~	訓練実施 ・踏切や遮断機のしくみ、渡り方について話を聞く。 ・模擬踏切による渡り方の訓練を行う。 （２人ずつ警報音や左右を確認して渡る。）
10：20~	閉会行事（進行：安全行事部） ①指導講評（鉄道会社の方） ②お礼の言葉 ③閉会の言葉

使用教材・準備物、留意事項など

●留意事項

- 「道路使用許可申請書」を早めに申請する。（教頭）
- ３年生以上の訓練中、児童の安全に十分配慮するために、交通指導隊の方に危険個所に立って指導していただき、警察にパトロールカーで巡回していただくように要請する。（教頭）
- 担任は１週間前までに、見学する児童（自転車に乗れない、けがをしている等）について確認し、交通安全行事担当に報告する。
- 時間が限られているため、自転車の貸し借りはしない。
- 当日の朝は、自転車をひいて登校する。下校時は、自転車に乗って帰ってよいが、安全に十分気を付けて帰るよう声掛けをする。

●係分担例

- 渉外（警察署交通課、駐在所、自治体支所）……教頭
- 進行、自転車置き場ライン引き（前日）……安全行事部
- 接待……養護教諭
- 縦割り班呼び出し放送……教頭
- 保護者へのお知らせ……教頭（学校からのおたより）、３～６年担任（学年だより）

学年 3年　単元 火事から人びとを守るために　関連する主な教科 特別活動

「くらしを守る」―火事から私たちを守るのは―

単元の目標

火災から地域の人々の安全を守る働きについて、施設・設備などの配置、緊急時への備えや対応などに着目して、見学・調査したり地図などの資料で調べたりしてまとめることで関係機関や地域の人々の諸活動をとらえ、相互の関連や従事する人々の働きを考え、表現する。それらの活動を通して、消防署などの関係機関は地域の安全を守るために、相互に連携して緊急時に対応する体制をとっていることや、関係機関が地域の人々と協力して火災の防止に努めていることを理解できるようにするとともに、主体的に学習を追究・解決しようとする態度や学習したことをもとに地域や自分自身の安全を守るために地域の一員として自分たちにできることを関係機関や地域の視点など、多角的に捉えながら考えようとする態度を養う。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・施設や設備などの配置、緊急時の備えや対応などについて、見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、必要な情報を集めて読み取り、関係機関や地域の人々の諸活動を理解している。 ・調べたことを地図や文などにまとめ、関係機関が地域の人々と協力して火災の防止に努めていることを理解している。	・施設や設備などの配置、緊急時の備えや対応などに着目して、問いを見出し、関係機関や地域の人々の諸活動について考え、表現している。 ・連携・協力している関係機関の働きを比較・分類、または結び付けて、相互の関連や従事する人々の働きを考えたり、学習したことをもとに地域や自分自身の安全を守るために地域の一員として自分たちにできることなどを考え、選択・判断したりして、適切に表現している。	・地域の安全を守る働きについて、予想や学習計画を立て、学習計画を振り返ったり見直したりして、学習課題を追求し、解決しようとしている。

▶単元の指導計画例

第１次	校舎にある防火設備に着目して、校内や地域を火事などから守る対策について関心を持ち、学習計画を立てる。	２時間
第２次	消防署の人たちの取組や火事などの発生時の対応や地域の取組について、調べたり見学したりして、まとめる。	４時間
第３次	消防署の人たち以外に火事などの発生時に対応する地域の取組を調べる。	３時間
第４次	消防署の人たちの火事などの発生時の対応や地域の取組について劇で表現して、学習全体をまとめる。	４時間 (本時３／４)

▶本時の展開例

本時の目標

消防署や地域の人たちの取組を劇で表現することを通して、関係機関だけでなく、地域の人々も協力して火災の防止に努めていることを多角的にとらえ、地域や自分自身の安全を守るために地域の一員として自分たちにできることを考えることができる。【思考・判断・表現】

※ここでは、市民役を第一発見者などの地域住民、地域役を消防団などの火事から市民を助ける人としている。劇中は、それぞれの役の言葉がどのようにつながっているのかを観察し、交流場面で教師の劇への評価を適宜行う。

過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価
導入	1. 火事からくらしを守る人々の働きをまとめた関係図を見ながら、それぞれの役の役割を確認する。	・関係図を用いて、火事が起きたときに多くの人たちが動いていることだけでなく、迅速に行われていることを確認することで、劇の緊張度を高める。 ・火事が発生したことを知らせる市民役が落ち着いて消防に伝えることが、劇の成否を左右することを押さえる。	
展開	2. 劇で表現する。 3. 劇で表現したことを、それぞれの立場で交流する。	・市民・消防・地域のそれぞれの立場になって劇化することで、火事という事象を多角的な視点で見ることができるようにする。 ・交流の際、それぞれの立場からほかの立場に対して思いや願いを伝えることで、単に仕組みを理解することだけでなく、地域社会の一員としての気づきが生まれるようにする。	
まとめ	4. 劇で表現したことや交流したことを振り返り、地域の一員として自分たちにできることについて考える。	・市民・消防・地域のそれぞれの視点を踏まえながらまとめるようにすることで、自分自身が地域の一員である自覚のもとに、「自分たちにできることは何か」を考えられるようにする。	【思】地域や自分自身の安全を守るために地域の一員として自分たちにできることを考えている。

学年 4年　単元 自然災害からくらしを守る　関連する主な教科 特別活動、理科

地震からくらしを守る活動

単元の目標

自然災害から人々を守る活動について、過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、聞き取り調査をしたり、地図や年表などの資料で調べたりしてまとめ、災害から人々を守る活動を捉え、その働きを考え表現することを通して、地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な備えをしていることを理解できるようにするとともに、主体的に学習問題を追及・解決しようとする態度や、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えようとする態度を養う。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などについて、聞き取り調査をしたり地図や年表などの資料で調べたりして、必要な情報を集め、読み取り、災害から人々を守る活動を理解している。 ②調べたことを年表や図表、文などにまとめ、地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解している。	①過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、問いを見出し、災害から人々を守る活動について考え表現している。 ②自然災害が発生した際の被害状況と災害から人々を守る活動を関連付けて、その働きを考えたり、学習したことを基に地域で起こり得る災害を想定し、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりして表現している。	①自然災害から人々を守る活動について、予想や学習計画を立てたり見直したりして、主体的に学習問題を追及し、解決しようとしている。 ②学習したことを基に地域で起こり得る災害を想定し、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えようとしている。

▶単元の指導計画例と評価

時	目標	主な学習活動	評価
1	・地域で過去に起こった地震について読み取り、被害や対策について理解する。	・写真や年表を照らし合わせながら、地域では、過去にどのような地震災害が起こったのかを調べて発表する。	知①発言内容やノートの記述内容から必要な情報を集め、読み取り、地域で過去に起きた災害の概要について理解しているかを評価する。
2	・地震がくらしに与える影響について考え、学習問題をつくり、学習計画を立てる。	・地震がわたしたちのくらしに与える影響や気付いたことについて話し合い、学習問題をつくる。 ・だれが、どのような、に着目して予想を立て、学習計画を立てる。	思①発言内容やノートの記述内容から地震災害時における人々の生活に着目して、問いを見出しているかを評価する。
3	・家庭では、地震に備えてどのような取組をしているのかを調べて話し合い、理解する。	・家庭では地震に備えてどのような取組をしているか、調べてきたことをカードに書いて話し合う。	知②インタビューメモやノートの記述内容から必要な情報を集め、読み取り、家庭では、起きる前の準備と起きてからの対策をしていることを理解しているかを評価する。
4	・学校や通学路では、地震に備えてどのような取組をしているのかを調べ、考え表現する。	・学校や通学路ではどのような準備や対策をしているか話し合う。 ・家庭の備えと比べ、似ている点、違う点を話し合う。	思②発言内容やノートの記述内容から家庭と同様に、学校や通学路でも、地震に対する準備や備えをしていることについて考え表現しているかを評価する。
5	・町では、地震から住民を守るためにどのような取組をしているのか話し合い、理解する。	・町ではどのような準備や対策をしているか、調べて分かったことを災害が起きる前と起きた後に分けて話し合う。	知②インタビューメモやノートの記述内容から必要な情報を集め、読み取り、町でも地震に対する準備や対策、県や国との連携を図っていることについて理解しているかを評価する。
6	・地震に備えて、町と住民が連携して対策に取り組んでいることを理解する。	・町と地域住民の連携について、調べて分かったことを話し合う。	知②発言内容やノートの記述内容から必要な情報を集め、読み取り、町と地域住民が連携しながら、災害に対する準備や対策をしていることについて理解しているかを評価する。
7	・学習を振り返り、自主防災組織の活動の学習の見通しをもとうとする。	・自主防災組織について調べたことを整理し、日頃から自分たちが地域にできることについて話し合う。	主①発言内容やノートの記述内容から家庭・学校・町と住民の準備や対策などについての学習を振り返り、まだ解決できていない、住民同士の取組について解決の見通しをもっているかを評価する。
8 本時	・これまでの学習を振り返り、地震に対する、家や学校、町における取組やその関連について理解する。	・家や学校、町の取組について分かったことや考えたことを整理し、比較する。	知②発言内容やノートの記述内容から家庭・学校・町全体、町や住民、住民同士などは、連携や協力をしながら、地震に対して、対策や準備をそれぞれの役割を果たしながら行っていることについて理解しているかを評価する。
9	・学校が避難所になった時について考え話し合うことを通して、いろいろな立場の人たちと協力していく大切さを考えようとする。	・「避難所シミュレーション」を行い、地震からくらしを守るために、自分たちにできることを考える。	主②発言内容やノートの記述内容から学習したことを基に、大地震が起こり学校の体育館が避難所になった時のために自分たちにできることを考えようとしているかを評価する。

▶本時の指導「地震からくらしを守る取組をまとめる」

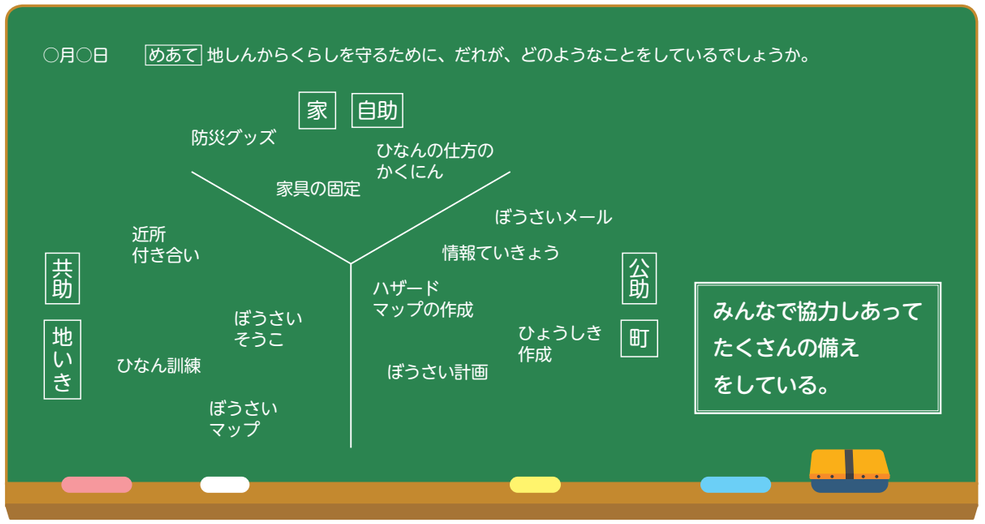
●本時の目標やポイント、準備物

〈本時の目標〉
　地域の関係諸機関や人々は地震に対し、様々な備えをしていることを理解する。
〈本時のポイント〉
　ICT 端末や大型提示装置を活用し、写真を共有することで、自助・共助・公助のそれぞれの役割を理解できるようにする。
〈準備物〉
　指導者…大型提示装置、タブレット
　児童…ワークシート、タブレット、筆記用具

●学習過程

過程	主な学習活動　◆主な発問や指示 ◇予想される児童の反応	学習形態	◎指導上の留意点・支援 ●校内研究との関連	☆評価規準（評価方法） ■準備物
導入5分	1　前時までに学習した災害からくらしを守る３つの視点を確認する。 ◆自助、共助、公助それぞれの役割は何でしたか。 2　本時の課題を知る。地震からくらしを守るために、だれが、どのようなことをしているのでしょうか。	一斉	◎家族へのインタビューや防災倉庫の見学などの写真や動画を見て振り返り、３つの視点の取組を共有する。 ◎単元の導入時に立てた学習問題について、再度考えることで、学習の成果を実感できるようにする。	■大型提示装置
展開30分	3　地震からくらしを守る取組を考える。 ◆地震からくらしを守る取組について考えましょう。 ◇防災バッグを用意する（自助） ◇地域の人と挨拶をする（共助） ◇避難の標識を立てる（公助）	個人	◎付箋紙に簡潔に記入するよう、例を示す。 ◎３つの視点による取組の写真を ICT 端末で共有し、考えやすいようにする。	■ワークシート ■付箋紙
	4　考えた取組を３つの視点に分類する。 ◆グループで考えた取組を自助、共助、公助に分類しましょう。 ◇防災倉庫は地域の人を助けるから共助だね。 ◇大きな工事は役所や国に頼まないといけない。	グループ	◎立場の違いによる役割の違いを明確にする。 ◎考えることが難しい児童には、グループワークで用いたワークシートを参考にするよう声掛けをする。 ◎学校、地域、町の取組の関連が分かるように、板書をしながら補足する。	☆地震に対して、家庭や学校などがそれぞれの役割を果たしながら対策をしていることを理解している。（発言、ノート）
	◆取組を３つの分類にした理由をグループごとに共有しましょう。 ◇家具を固定することは家でできるから自助だと思う。 ◇避難場所の看板は地域にあるから共助だと思う。	一斉	◎黒板に児童の考えた取組を分類しながらカードを用いて示す。 ◎自助、共助、公助の取組は、関連していることに気付けるような問い掛けをする。	■カード ■大型提示装置
	5　いろいろな取組が行われている理由を考える。 ◆どうして、防災倉庫があったり、防災計画を作ったりするのでしょうか。 ◇みんなのためにしてくれている。 ◇わたしのためでもある。	個人	●地域素材を生かした教材（写真等）を提示することで、地震に対する取組が自分の安全のために行われていることに気付き、対策をしてくれている方への感謝の気持ちをもてるようにする。 ◎物に加えて人の気持ちに気付かせる問い掛けをする。	■ ICT 端末 ■ワークシート
終末10分	6　本時の学習を振り返り、学習感想を書く。 ◆本時の学習で分かったことは何ですか。 ◇地震に備えて、たくさんの人たちが準備をしている。 ◇自分にできることは何かないかな。	個人	◎意図的に指名して、自分とは違う友達の意見に気付けるようにする。 ◎タブレットを用いて、記入した振り返りを共有する。	■ワークシート ■大型提示装置 ■ ICT 端末

▶板書計画



学年 5年　単元 流れる水の働きと土地の変化　関連する主な教科 社会、体育（保健領域）

地域の川の災害の可能性

単元の目標

流れる水の働きと土地の変化について、流れる水の速さや量に着目して、それらの条件を制御しながら、流れる水の働きと土地の変化を調べる活動を通して、それらについての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主に予想や仮説を基に、解決の方法を発想する力や主体的に問題解決しようとする態度を育成する。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①流れる水には、土地を浸食したり、石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあることを理解している。 ②川の上流と下流によって、河原の石の大きさや形に違いがあることを理解している。 ③雨の降り方によって、流れる水の速さや量は変わり、増水で土地の様子が大きく変化する場合があることを理解している。 ④実験器を正しく扱いながら調べ、過程や得られた結果を適切に記録している。	①流れる水の働きと土地の変化について、問題を見出し、主に予想や仮説を基に、解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。 ②流れる水の働きと土地の変化について、観察、実験などから得られた結果を基に考察し、表現するなどして問題解決している。	①流れる水の働きと土地の変化についての事物・現象に進んで関わり、粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとしている。 ②流れる水の働きと土地の変化について学んだことを学習や生活に生かそうとしている。

▶単元の指導計画例（全９時間）

※評価：評価規準参照　【行】行動分析　【記】記録分析　【発】発言分析

過程	配時	主な学習活動と内容	指導上の留意点 ICT 端末活用の意図	評価
第一次	1	1. 地域の川の普段の様子と増水したときの様子を比べ、追究課題を立てる。	問題を見出すことができるように、普段の様子と増水した様子を提示する。	思①【記】
第二次	3 ①	2. 川モデル実験器を使い、流れる水の作用や土地の様子の変化について調べる。 (1) 川の上流や下流での水の働きや、水量が多い時の水の働きについて調べる。 ●流水により土が削られることや、水の増加で削られる部分も増えること。	○直線の川の上流や下流での違いに着目することで、水の働きを捉えることができるようにする。 事実を捉える	知①【記】
	①	(2) 水の流れが速い時の水の働きについて調べる。 ●水の流れが速いと土が多く削られること。	○直線の川の傾斜を変えることで、水の働きが変化することを捉えることができるようにする。	思①【記】
	①	(3) 曲がった川の内側・外側の流れの速さや、水量が多い時の水の働きについて調べる。 ●川の内側より外側が水の流れが速く、土が削られやすいこと。 ●水量の増加で川の内側も外側も土が削られること。	○カーブの内側と外側の水の速さや様子の違いに着目することで、水の働きの違いを捉えることができるようにする。 事実を捉える	主①【記】
	1	3. 川の上流と下流の河原の石の形や大きさについて調べる。 ●川の上流の石は大きく角ばっており、下流の石は小さく丸みがあること。 ●流れる水によって石が流され、割れたり削られたりして形を変えること。	○上流と下流の石やその場所の川の流れの映像や写真を提示する。	知②【記】
第二次	1	4. 資料をもとに雨量と川の水量の関係について調べる ●雨量によって川の水量が増えること。また、雨量の多かった翌日に川の水量が増えることもあること。	○雨量と川の水量のグラフを比較することで、降雨後に水量が増えることを捉えられるようにする。	知③【記】
第三次【発展】	3 ②本時 ①	5. 学んだことを活用し、地域の川に目を向け、防災の取組について調べる。 (1) 地域の川を模した川モデル実験器を使い、どこでどのような災害が起こる可能性があるか調べる。 (2) 洪水を防ぐ工夫について、資料やインターネットを使って調べる（発展）。	○工事前後の地域の川の写真を提示し、自分たちの考えが正しいかどうか確かめることができるようにする。 認識を深める ○自分の身を守る方法について知ることができるようにする。	思②【記】 主②【記】 主②【記】

▶本時の展開例（全２時間）

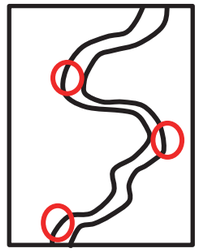
本時のねらい

思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
既習を生かし、地域の川の危険箇所について考えたり、自分の考えを交流したりすることができる。	地域の川で大雨が降った場合、どこでどのような災害が起きる可能性があるのか、意欲的に調べることができる。

【本時の指導の工夫】

「つかむ」段階の「対話ユニットⅠ」では、流れる水の働きの学習で明らかになったことを身近な地域の川に結びつけて考えることができるようにし、大雨が降ったとしたら地域の川のどこでどのような災害が起きるだろうかという問題を見出だすようにする。子供たちが、「流れる水の量が多いほど、水が川の土を削る働きや下流に運ぶ働きが大きくなる」ことを確認し、「川幅の狭いところで水があふれ、近くの住宅が被害を受けるのではないか」「川の曲がっているところで土が削られ、その削られた土が川下に運搬され、堆積することで水があふれ、住宅に水が流れ込むのではないか」などと考えることができるようにする（自然事象との対話）。予想では、地域の川の航空写真に自分の考えを記入していくことで、流れる水の量と川岸の様子の変化について見ていくという視点（今日のポイント）と、水の量を変化させたときの川岸の様子について、条件を制御して解決の方法を発想することに気付くことができるように工夫する。また、予想を交流する（他者との対話）ことで、考えを付加・修正、強化したり、友達の意見から選択したりできるようにする。対話ユニットⅠを通して、地域の川で大雨が降ったときにどのような災害がどこで起きるか、流れる水の量と川岸の様子の変化を理由とした予想を説明できる子供の姿を目指す。

「さぐる」段階の「対話ユニットⅡ」では、流す水の量を変えて実験し、実験結果を地域の川モデルの絵図に表現することで、川幅が細い部分や急激に曲がっている部分は流れる水によって削られることや、土手の部分も流れる水によって削られて決壊したり、削られた土砂が川以外のところに堆積したり下流に運ばれたりして、被害が大きくなることを捉えることができるようにする（自然事象との対話）。結果の分析・考察では、地域の川モデルに表現した結果を基に考察し、自分の考えを他者と交流する（他者との対話）。その際には、地域の川モデルの結果の写真（ICT 端末）に、変化の見られた箇所やその変化からどのような災害が考えられるのかを書き込みながら、自分の考えを他者に伝えることができるようにする。対話ユニットⅡを通して、大雨が降ったときに地域の川のどこでどのような災害が起きる可能性があるのか、既習内容を生かして説明できる子供の姿を目指す。



最後に、発展的な内容として「つたえる」段階の「対話ユニットⅢ」では、「どのような対策をとれば、災害を防ぐことができるだろうか」という問いに対して、川の護岸の強化や川幅・川底の改善といった考えをもつことができるようにする（自然事象との対話）。問いに対する考え作りでは、実験結果を基に考え、他者と交流する（他者との対話）。そして約十年前の豪雨後から行われている護岸工事の様子について知らせることで、今は安全に暮らせていることを捉えることができるようにする。対話ユニットⅢを通して、「護岸工事や川の流れの改善工事といった対策がとられているから、安心して暮らすことができる」といった、流れる水の働きと実際の生活を結びつけて説明できる子供の姿を目指す。

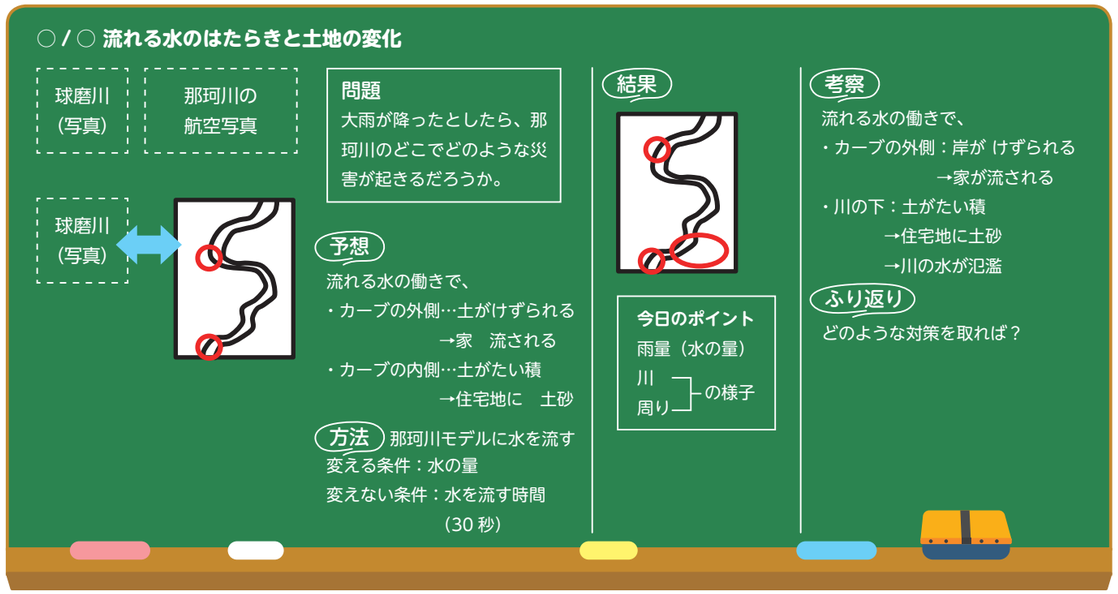
【本時の展開①（7／9）】　※実際の展開例。球磨川（熊本県）、那珂川（福岡県）を用いた例

段階	学習活動・内容	指導上の留意点・評価
つかむ	**対話ユニットⅠ** **1. 提示された事象を見て分からないことを書く。** 球磨川の写真 ↔ 那珂川の航空写真 → もし大雨が降ったら、那珂川の近くはどんな災害が起きるだろう。 なぜ 「自然事象との対話」 **2. 分からないことを出し合い、問題を見いだす。** ・もし大雨が降ったら、那珂川周辺はどのような災害が起きる可能性があるのか調べたい。 問題　大雨が降ったとしたら、那珂川のどの辺りでどのような災害が起きるだろうか。 **3. 問題に対する予想を考え、話し合う。** (1) 予想を考える。 ・流れる水の量が多くなると川の曲がっているところを削る働きが大きくなるので、そこから水があふれて住宅に被害が出ると思う。 ・上流から削られた土が流されて下流に運ばれてくるので、下流の方に土がたまって、川が氾濫して住宅に浸水すると思う。 (2) 予想を交流し、自分の予想を見直す。 「他者との対話」 流れる水の堆積作用を根拠とした予想 ↔ 流れる水の浸食作用を根拠とした予想 (3) 予想を出し合う。 流れる水は曲がったところの外側で削る働きが大きくなり、「それを下流のほうへ運搬するから」（付加）、曲がったところや下流で水があふれて住宅に浸水するのではないか。 **4. 予想を確かめるための実験方法を考える。** ・那珂川モデルに水を流し、川の様子の変化を調べる方法を考える。	**事象提示の工夫** ○令和２年７月の球磨川の災害の写真と那珂川の航空写真を提示し、もし大雨が降ったら那珂川のどの辺りでどのような災害が起きる可能性があるか、問題を見出せるようにする。 ○前時までに「洪水」「氾濫」「浸水」「土砂崩れ」について指導しておく。 ○大雨のときの川や土地の様子の変化という時間的・空間的な視点で予想を立てられるように、今日のポイントを板書する。 今日のポイント 雨（水）の量　　川や土地の様子 **情報の可視化Ａ** 航空写真を縮小した絵図を用いて、どこでどのような災害が起きそうか、予想を表す。 **情報の可視化Ｂ** 自分の予想を書き込んだ絵図を用いて、自分の予想を他者に伝える。 タブレットを使用し、那珂川の航空写真に書き込みながら説明し合えるようにする。 【思考・判断・表現】 流れる水は川のカーブの外側で削る働きが大きくなり、下流へ運搬するから、曲がったところで川が氾濫したり下流で水があふれたりすると思います。 ○「雨（水）の量」という条件に着目させ、水量を変化させて調べるとよいことに気付けるようにする。 ○通常の川の様子と大雨のときの川の様子を比較するために、水を流す時間は変えないことを確認する。

【本時の展開②（8／9）】　※実際の展開例。球磨川（熊本県）、那珂川（福岡県）を用いた例）

段階	学習活動・内容	指導上の留意点・評価
さぐる	**対話ユニットⅡ** **5. 実験する。** 「自然事象との対話」 **6. 結果の分析・考察を行う。** (1) 実験結果から考察を書く。 〈個人の結果〉　〈グループの結果〉 ・やはり川の曲がっているところが削られて水があふれ、住宅地に水が流れ込む。 (2) 予想を交流し、自分の予想を見直す。 「他者との対話」 堆積作用と関係付けた考察 ↔ 浸食作用と関係付けた考察 (3) 考察を出し合う。 曲がっている川岸の外側が削られて水があふれたり、削られた土が川の下の方に積もって住宅地に向かって水があふれたりするから、大雨が降ると那珂川の近くでは大きな被害が出そう。	**事象提示の工夫** ○実験の様子を ICT 端末で撮影し、変化する様子を繰り返し観察することができるようにする。 「事実を捉える」 **情報の可視化Ａ** 那珂川モデルの写真を用いて、大雨の場合どうなるか、結果や結果から考えられることを考察する。 予想と似た絵図を用い、どのような災害が起きたのか予想と比較できるようにする。 **情報の可視化Ｂ** 那珂川モデルの写真を用いて、雨量の多いときにどうなるのか他者に伝える。 どこでどのような災害が起きる可能性があるか、皆の考えをまとめる。 【思考・判断・表現】 結果は、私の予想と○○でした。流れる水が川岸を削ってあふれたり、削られた土砂が川の下の方で積もって水があふれたりする可能性があると分かりました。
つたえる［発展］	**対話ユニットⅢ** **7. 那珂川の災害を減らし、安全な川にするにはどうするとよいか考える。** (1) 自分の考えをつくる。 「自然事象との対話」 (2) 予想を交流し、自分の予想を見直す。 「他者との対話」 堆積した土を除くという考え ↔ 護岸を強化するという考え (3) 考察を出し合う。 川岸の土が削られないように、コンクリートで補強するといいはずだ。 なるほど	**活用** ○那珂川で大雨による被害が出ないようにするには、どのような対策をとるとよいか問いかけ、実際の対策に目を向けることができるようにする。 **情報の可視化ＡＢ** 那珂川モデルに貼っている地域の写真を用いて、どこでどのような対策をとるとよさそうか、本時の実験結果と結びつけて説明する。 ○護岸工事の様子が分かる写真や映像を見せることで、対策が講じられていることに気付けるようにする。 「価値を深める」

▶板書計画



※７時間目の予想の交流（本時の実験結果の交流は、ホワイトボードにプロジェクターで映す）。

使用教材・準備物、留意事項など　実際の指導の例

●教材１「那珂川の航空写真」

平成 21 年７月に発生した中国・九州北部豪雨の被害が出る以前の那珂川近辺の航空写真。川の部分に色を塗り、川の曲がりくねった様子や川幅の広さなどを視覚的に捉えることができるようにした。

●教材２「那珂川モデル」

川近辺の航空地図にラミネートをかけ、発泡スチロール板に貼り付けた。発泡スチロール板の底面にはプラスチック段ボールを貼り付けている。那珂川・その近辺をくり抜き、土を入れて流路を作ることができるようにした。流路は、那珂川を型抜きのようにした。発泡スチロール板とプラスチック段ボールではしなるため、底に長い木の板を貼って強度をあげている。また、水を流すときに透明ホースから出てくる水の向きが一定になるように、川の上の部分（水を流し始めるところ）に太いホースを貼り付けた。

※材料について
・2.5mm の厚さのプラスチック段ボールを使用。
・10mm の発泡スチロールで住宅地や外周の壁の部分を作成。
・川の型抜きは、20mm の発泡スチロールを使用。
・土は、学校の畑の土をふるいにかけた物（水分保持力が高い）を使用している。

●教材３「水を流す装置」

【通常の川の様子を実験する場合】

【大雨のときの川の様子を実験する場合】

ペットボトルに取り付けることのできる水栓に、透明ホースを付けている。大雨のときの川の様子について実験する場合には、内径 9mm ×外径 12mm の透明ホースを使用した。通常の川の様子を実験する場合には、大雨の場合の透明ホースに、さらに内径 6mm ×外径 9mm、内径 4mm ×外径 6mm、内径 2mm ×外径 4mm をつないだ。また、内径 18mm ×外径 20mm の透明ホースを那珂川モデル上部の水を流すところに付けておき、そこに水を流す装置を差し込むようにすることで、水を流すときの条件を揃えることができるようにした。

●教材４「実際の那珂川の映像」

平成 21 年の中国・九州北部豪雨前後の川の様子をプレゼンテーションにまとめた。改善工事の資料は、福岡県那珂県土整備事務所より提供してもらった。これを見る場を設定することで、大雨による那珂川の被害に備える工夫に目を向けることができる。

●児童の実態と指導方略

〈単元目標に対する児童の実態〉

本学級の子供たちは、第４学年「自然の中の水」の学習において、地面の傾きによる水の流れや土の粒の大きさと水のしみこみ方について学習している。事前アンケートによると、水の流れによって水害が起きることに気付いている児童は、32％だった。また、水害が起こることには気付いているが、そのときに土地が削られたり、削られた土砂が下流に運搬され堆積したりする水の働きによって水害が起きることに目を向けることができている児童は、7％だった。川を目にする機会はあっても、水が土を削ったり運んだり積もらせたりするといった働きと結びつけて見ていないからだと考えられる。そこで、水の流れと土地の変化の関係を、水の速さや量に着目して、条件を制御しながら調べることができるこの時期に本単元を取り上げる。このことは、自然の連続的な変化を認識するとともに、水量の変化の観察から、洪水時の川の劇的な変化を認識し、自分たちの周りの自然環境から自分の身を守る防災意識と、それに関する知識をもたせる上でも意義深い。

〈児童の実態に即した指導方略〉

本単元の指導にあたっては、以下の点に留意して進めていきたい。

第一次では、普段の那珂川の様子と、雨により増水した那珂川の様子を比較することで、川の様子や水量の違いに気付くことができるようにする。そして災害から身を守るために、流れる水や増水による土地の様子の変化について追究していくことを確認し、追究課題とする。

第二次では、川モデル実験器（那珂川モデル）を使って水を流す実験を行い、流れる水の「浸食」「運搬」「堆積」の作用を捉えることができるようにする。このときに、時間的な見方を働かせることができるように、実験前後の写真や映像で比較し、変化の様子を捉えることができるようにする。次に、上流と下流の様子や河原の石の形や大きさに目を向け、石の形状と川の流れとの関係について捉えることができるようにする。最後に、川の水量が増えた場合の流れる水の働きの違いを捉えさせ、生活場面とつなげる。

第三次では、学んだことを使って那珂川で災害が起きる可能性のある場所や災害の種類について考えたり、防災のための取組について調べたりし、自分の身を守るための方法に目を向けることができるようにする。

●本単元で働かせる主な見方・考え方

見方	流れる水の働きと土地の変化について、時間的・空間的な見方を働かせる。
考え方	流れる水の働きと土地の変化について、要因を抽出し、条件を制御して問題解決を図る。「本時の展開」で示した例では、那珂川モデル（川モデル実験器）を使って、水の量を変えたときの川岸の様子や起きる災害の可能性について、条件を制御しながら解決の方法を発想する。

学年 5年　関連する主な教科 社会、理科、体育（保健領域）、国語

地域の風水害について調べよう―身近な災害から身を守るために―

単元の目標

地域の風水害の歴史に関心を持ち、公助の取組を調べていく中で自助の大切さに気付き、自分の身を守るための行動や備えについて考えることができるようにする。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①自分たちの地域が浸水する恐れがあることを知るとともに、地域における防災の大切さを理解している。 ②自然災害（風水害）に対する備えや防災の意識を生活の中に取り込むために、自分たちにできることを見つけ、課題ごとに適した方法で調べ活動を実施している。 ③防災意識を自分たちの生活の中に取り込むために、防災（風水害）の大切さを発信したり自分たちにできる備えを紹介したりする。	①自然災害（風水害）に対する備えについて自分事として課題を見つけ、学習課題を設定している。 ②最近の地域における風水害の状況から、何が大切かを考え、課題を解決するための学習計画を立てている。 ③調べ活動から得た情報をまとめ、情報を精選しながら、自分たちの身を守る行動や自然災害（風水害）に対する備えについて考えている。 ④各自の考えや、集めた情報等を分類しながら、自分たちの思いを分かりやすくまとめている。	①自然災害（風水害）の具体的な状況、地域の方や専門家の話、これまでの体験などから必要な情報を集め、それらの情報を活用しながら課題を追究している。 ②自然災害（風水害）に対する備えや自分の身を守る行動の大切さを発信するために、友達と考えを交流し、協力して課題解決に向けて取り組もうとしている。 ③自分たちの地域も浸水する恐れがあることを自覚し、一人ひとりができることを考えて率先して取り組んでいる。

▶指導計画（全33時間）

時	学習活動	○支援・留意点	評価
1	・自然と人間の関わりについて話し合う。 ・自分たちが経験した自然災害について振り返り、風水害を調べていくことをとらえる。	・「自然の恐さ」だけではなく「自然のおかげで私たちの生活は豊かになっている」ことを確認する。 ○台風（暴風）や大雨の写真を掲示し、風の恐ろしさや風による被害に気付けるようにする。	・自然災害について関心を持ち、自然災害について調べたい内容を考えている。【思①】
2	・台風（暴風）について過去のニュースや新聞記事からどんな被害があるのかを知る。	○台風（暴風）のニュースを取り上げた写真や動画から風の恐ろしさや風による被害に気付けるようにする。	・暴風関連のニュースからどのような被害があるのか、考えている。【知①】
3	・台風（洪水）や集中豪雨について過去のニュースや新聞記事からどんな被害があるのかを知る。	○鬼怒川の決壊（平成27年台風18号）のニュースを取り上げ、写真や動画から床下浸水や床上浸水など様々な被害があることに気付けるようにする。	・大雨洪水関連のニュースからどのような被害があるのか、考えている。【知①】
4	・地すべり・土砂崩れ・土石流について過去のニュースや新聞記事からどんな被害があるのかを知る。	○写真や動画から山沿いの地域には様々な危険が伴うことに気付けるようにする。 ・地すべり、土砂崩れ、土石流それぞれの意味合いが異なることをおさえる。	・土砂崩れや土石流のニュースからどのような被害があるのか、考えている。【知①】
5	・竜巻や雷について過去のニュースや新聞記事からどんな被害があるのかを知る。	・写真や動画から竜巻や雷の恐ろしさや被害に気付けるようにする。	・竜巻や雷のニュースからどのような被害があるのか、考えている。【知①】
6 7	・体験活動を通して、水災害の恐ろしさを実感し、災害についてさらに知ろうという意識をもつ。	○地域の施設で水災害の体験を行うことによって、自分たちの想像を超える災害の威力を感じることができるようにする。	・水災害の威力を体験し、災害の際の様々な危険性について考えている。【知②】
8	・自分たちの暮らす地域は安全な街（水害に強い町）と言えるのか意見を交流し合い、「校区の風水害の歴史」について調べるという学習課題を持つ。 ・自分たちの地域で起こった過去の風水害について、調べていきたいことや調べるための方法、手段を話し合う。	・安全な街かどうかを自分たちの知っていることをもとに理由をつけながら発表し合えるようにする。 ・校区の歴史について調べていくための方法や手段を交流する。 ○整備されてきた川の写真などを掲示して、災害があったことと整備が進んだことを結びつけて考えられるようにする。 ○整備されてきた川の写真などを提示して、整備されてきたのは災害があったからかもしれないということに気付けるようにする。	・安全な街かどうか自分の考えを伝えている。【思②】
9	・地域の方に周辺の川の氾濫について話を伺い、過去の校区の災害について知る。	・災害時にどのような困りがあったのか考えられるようにする。 ・水害を防ぐために河川や土手が整備されてきたことも伝えていただく。	・地域の方の話から当時、どのような困りがあったのか、考えている。【思②】
10	・校区の災害について知ったことから、学習課題を考える。	・地域の方から「昔、こんな災害があった」と話してもらうこととつなげることで、聞きたいことを具体的に考えられるようにする。	・どのように街の整備が進められてきたのか、インタビュー内容を考えている。【主①】
11 12	・土木事務所の人に「災害から町を守るためにどのような取組を進めてきたのか」をインタビューする。	・土木事務所の方から話を聞くことで、暴れ川と呼ばれた川の整備を進め、水害に強い町作りのために取り組んできたこと（公助）に気付けるようにする。 ・定点カメラで水位の観察を行ったり、土砂災害警戒区域をインターネット上に掲載したりするなど整備以外での公助の取組があることにも気付けるようにする。	・土木事務所の方にインタビューをして「どのように街の整備が進められてきたのか」を考えている。【思③】
13	・消防署の人に校区で「土砂崩れ」が起こりやすい場所について話を聞く。	・自分たちの住んでいる地域にも土砂崩れが起こりうることを消防の人から話を聞く。 ・実際の写真などを見ていつ起こってもおかしくないことに気付けるようにする。	・自分たちの地域で土砂崩れが起こりそうな場所について調べている。【知②】
14 15	・川の上流や砂防ダムを見に行き、どのような整備がされてきたのか実際に行って確かめる。	○砂防ダムを見ることで、ダムの働きを考えられるようにする。 ・コンクリートにしたり水門をつけたり公助が進められてきたことに気付けるようにする。	・土木事務所の方の話と関連付けながら見学し、ダムや水門ができたこと、コンクリートになったのは過去の災害があったからだということに気付いている。【主①】
16	・公助での取組を振り返り、気付いたことや感じたことを交流する。	・災害をきっかけに公助が進められてきたことを振り返るようにする。	・公助における防災を学習してきたことについて、自分の思いを友達と伝え合っている。【思④】
17 ~ 19	・公助でどのような取組が進められてきたのか調べたことをまとめ、整理する。	・地域の地図にまとめたり新聞にまとめたりして、公助について自分たちが調べたことを振り返ることができるようにする。	・公助における防災について調べてきたことを友達と協力してまとめ紹介している。【知③】
20	・ハザードマップを見て自分たちの住んでいる地域が必ずしも安全でないことを知る。	・床下浸水、床上浸水などの言葉をおさえる。 ○ハザードマップから自分たちの住んでいる校区も浸水の恐れがあることを知ることで、過去に自分たちの地域は災害がなかったか調べていこうという課題を持ちやすくする。	・自分たちの地域が浸水する恐れがあることに気付き、調べていきたいことについて考えている。【主②】

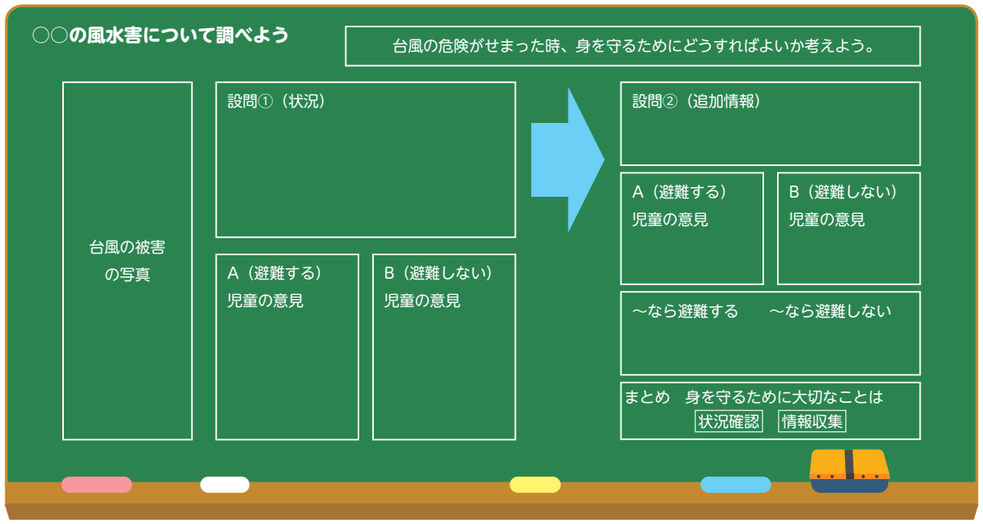
時	学習活動	○支援・留意点	評価
21	・自分たちはどのような備えや心がまえをする必要があるのかを話し合う。	・過去の災害から、公助によって地域の整備は進められてきたが、一人ひとりの防災意識を高めることが大切だということに気付けるようにする。 ・風水害が起こった場合、どのような困りが出てくるのかを出し合い、どのような備え（物の備えと心の備え）をしていけばよいのか自分事として考えられるようにする。	・自助で自分たちに実際できることは何か考えている。【思①】
22 本時 23	・それぞれの災害(台風･土砂崩れ･雷など）に応じた身の守り方について考える。	・子供の生活に近い状況を設定するようにする。 ・それぞれの自然現象の被害を思い出しながら、いざという時に自分で身を守れるように正しい判断をすることが大切だということに気付けるようにする。	・風水害の具体的な状況から、自分の身を守る行動を考えている。【知①】
24	・災害前にはどのような情報が必要なのか考えを話し合う。	・情報をすばやく集めることで、自分たちが正しく判断できるようになるということに気付けるようにする。	・状況をイメージしながらどのような情報を知っておくとよいか考えている。【思④】
25	・災害時や災害後、どのような情報がどこから発信されているのか知る。	○災害時は電子機器類も使えなくなるかもしれないなど災害時や災害後の町の様子を想像することで様々な情報の集め方を事前に知っておいたほうがよいということに気付けるようにする。	・災害時の様子を想像し、様々な情報の集め方や出される情報の内容を事前に知っておくことの大切さに気付いている。【知①】
26	・防災バッグの中身について考え、話し合う。 ・自分たちの住んでいる町ごとの避難場所を確認する。	・防災バッグの中身について必要なものとあったら便利なものを考えられるようにする。 ・家族構成や年齢によって必要なものが違ってくるということに気付けるようにする。 ・住んでいる地域によって自分たちの小学校に避難するのか、地域の中学校に避難するのかおさえる。 ・家族で日頃から集合場所を確かめあっておく必要性にも気付けるようにする。	・自分の家族構成などを考えながら防災バッグの中身として必要なものは何かを考えている。【思③】
27	・調べたことを保護者にも知ってもらうための新聞を作る。	・「地域の防災意識を高めるために」という目的を伝え、意欲を付けられるようにする。	・どのような内容を保護者に伝えていったらよいか友達と意見を出し合いながら考えている。【思④】
28 ～ 32	・壁新聞や地域のマップなどに調べたことや大切だと思ったことをまとめる。	・自助で自分たち（家庭）にできることを中心にまとめるようにする。 ・公助でまとめたものも掲示し、自分たちの意識が大切だということを再確認できるようにする。	・調べたことをもとに自分の考えを友達と伝え合っている。【思④】【主③】
33	・公助としてすすめられてきたことを振り返り、自助で大切なことについて自分の考えをまとめる。	○これまでに学習してきたワークシートや壁面掲示を振り返り、自分の判断や行動が特に大切だと思うことを中心に考えを書く。	・自助で自分たちにできることを振り返り、友達と伝え合っている。【知③】

▶本時の展開（22/33 時間）

本時の目標　その場の状況に応じて、学習してきたことをもとに、自分の身を守る行動を考えることができるようにする。

学習活動	○教師の主な発問 ・予想される児童の反応	○支援・留意点 ◎評価の視点(評価の方法)
1．台風でどんな被害が出るのかを想起する。	○台風では、どんな被害が起こりますか。 ・暴風で物が吹き飛ぶ。 ・大雨が降り、川の水が増水する。 ・道路や家が浸水する。 ・電気が使えなくなる。	○教室の壁面掲示や写真に注目することで、被害状況を想起しやすくする。
台風の危機がせまった時、身を守るためにどうすればよいか考えよう。		
2．設問①において、自分なら避難するか、しないのかを理由づけて考える。 設問①（状況設定の概要） 「避難準備」が出ている。 ・一人で家にいる。 ・親は遠くに外出中で、帰って来られなくなった。 ・電話がつながらない。 ・時間が経過すると、住んでいる校区に大雨特別警報が発令され「避難勧告」に変わった。 ・グループ学び ・みんな学び（全体交流）	○次の状況で、自分なら避難しますか？しませんか？ (A・避難する) ・「避難勧告」に変わったので、避難した方がよい。 ・もっと雨風が強くなるかもしれないから、早めに避難した方がよい。 (B・避難しない) ・避難指示ではないので、避難しなくてよい。 ・外に出る方が危ないと思う。 ・もっと情報を集めてから安全に避難すればよいと思う。	○設定状況を具体的にイメージできるように、映像を見せる。 ○自分の立場を明確にしたり、友達の立場を把握したりしやすいよう、A とB のカードを用いて意見を提示する。 ・意見交流では、理由を伝え合うことが大切であることを確かめる。 ○意見交流で状況設定を確認しやすいよう、グループ毎に状況設定を書いた紙を渡す。 ・グループ交流中、交流後に、意見が変わってもよいことを伝える。 ○上記同様、追加情報を具体的にイメージできるように、映像を見せる。 ・意見交流の際、本時のめあてに逸脱した話し合いになっているグループがあれば、助言していく。 ○意見交流後に自分の意見を書く際、自分の意見を具体的にもてるよう、A とB の二択に限定せず、「～なら避難する。」「～していたら避難しない。」等の言葉で書くようにする。 ◎風水害の具体的な状況から、自分の身を守る行動について考えている。（話し合い、ワークシート）
3．設問②において、自分なら避難するか、しないのかを理由づけて考える。 設問②（追加情報） ・「避難勧告」が「避難指示」に変わった。 ・家の前の道路が 20cm 浸水している。 ・テレビで避難所の様子が映り、そこに友達も映っている。 ・グループ学び ・みんな学び（全体交流） ・一人学び（書く→発表）	○状況が変わりました。自分なら避難しますか？しませんか？ (A・避難する) ・近所の人に声をかけて、いっしょに避難すれば安全。 ・道路の浸水が始まっている。家も危ないかもしれない。 (B・避難しない) ・浸水が始まっている。足元が見えないから危険。 ・2 階にいれば命は守れる。 ↓ (一人学び) ・浸水の状況をよく見て、水位が上がっていたら避難しない。 ・雨風が弱まったら、タイミングよく避難できると思う。	○自分の身を守るのに大切な「状況確認・情報収集」の 2 つに気付けるよう色分けやラインの引き方で分類しておく。 ・「状況確認」や「情報収集」は身を守る行動をする際の判断基準になることをおさえる。
4．学習内容をまとめる。	○自分の身を守るために大切なことはなんでしょう。今日のみんなの意見から共通することを見つけましょう。 **命を守るために大切なことは** ・状況確認 ・情報収集	
5．学習の振り返りをする。	○今日の学習をして自分が学んだことや気づいたこと・考えたこと等を書きましょう。 ・状況を確かめたり情報を集めたりして、自分で考え、判断することが大切だと思った。 ・事前に心の準備と物の備えをしておくことも大切だと感じた。家族にも伝えたい。 ・もし自分の地域で水害が起きたら、今日の学習を生かして身を守りたい。	

▶板書計画



●学習活動構想図（全 33 時間）　※京都市の学校での例

であう　1H

自然のよいところと悪いところを考えよう。

- 自然のおかげで自分たちの生活が豊かになっていることもあるよ。
- 太陽光発電や水力発電などもあるね。
- 便利で恩恵は受けているけど自然災害も起こっているよ。

どのような自然災害があるのか考えよう。

- 突然の大雨や台風による災害が多くなってきた気がするよ。地震もあるね。
- 特別警報なども最近は発令されるようになってきたね。
- 日本ではどんな被害が出ているのだろう。

つかむ　6H

実際に自分たちの生活におきかえて災害について考えよう。

- 嵐山でも桂川が決壊して被害が出ていたね。
- 鴨川が大雨の影響で水位が上がっているのを見たことがあるよ。溢れそうだった。
- 意外と経験した災害は少ないけどニュースで全国的な災害の報道を見たことがあるよ。

日本各地で起こる風水害の被害について知ろう。

- 鬼怒川の映像など、テレビで見たけど怖かったな。
- 土砂崩れは広島で起こって、被害が出ていたね。
- 雷やゲリラ豪雨もこんな被害が出ているんだ。

さぐる　12H

京都は安全な街（水害に強い街）といえるのか考えよう。

- 鴨川は氾濫したことがないのかな。
- 京都は山に囲まれているから、土砂崩れなどがあったかもしれないよ。
- 大雨特別警報がこの前出ていたから安全じゃないと思うよ。
- 高野川は氾濫したことが無いから安全だと思う。

京都の風水害の歴史を知り、どのような公助が進められてきたのか調べよう。

- 流れ橋といって昔は高野川に架かる橋が流されていたらしいよ。
- 水の量を観察するカメラがあるとすぐに情報が届くから安心だね。
- 砂防ダムは土砂災害を防ぐ役割で作られたんだね。
- 安全な町づくりが進められてきたんだね。

深める　7H（本時）

自分たちの命やくらしは、安全であるといえるのだろうか。

- ハザードマップを見ると浸水する地域が多いね。校区も浸水するよ。
- 公助だけでなく、自分で命を守ることも大切なんだな。
- 高野川が近いから危ないな。

どのような備えができるのか考えよう。

- いざという時に備えて、いろいろと知っておくことが正しい判断につながるよ。
- 公助に安心せずに、一人ひとりの物の備えと心の準備をしておくことが大切だね。
- 自分たちにできることから始めていきたいな。

ひろげる　7H

学習してきたことを保護者の人に伝えよう。

- 地域の防災意識を高めるために、まずおうちの人へ発信しよう。そのためにもっと詳しく調べよう。
- 過去の災害や公助で様々な取組が進められてきたことも知ってもらいたいね。
- 家族構成に合う備えってどのようなものだろう。

自助において大切なことを振り返ろう。

- 自分たちも公助に頼らず、備え続ける必要があるね。
- 家で防災バッグを作ったり集合場所を話し合ったりしよう。
- 自分の命は自分で守ることができるようにしていきたい。

学年 1年　単元 A　主として自分自身に関すること　【節度、節制】

「かぼちゃのつる」

本時のねらい　健康や安全に気を付け、身の周りを整え、わがままをしないで気持ちのよい生活をしようとする態度を育てる。

▶他の教育活動との関連

体育科：ドッジボールの学習では、頭部への送球はしないこととし、安全のきまりを守ってゲームを楽しむ。
図画工作科：造形活動では、材料を順番に並んで選んだり、用具の使い方に気を付けたりしながら作品作りを楽しむ。
日常生活：相手の立場を考えながら、わがままをしないで生活できるようにする。
　　廊下は安全に右側を歩行できるようにする。

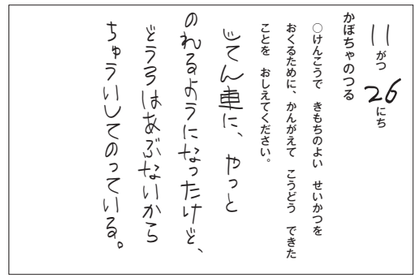
▶本時の展開例

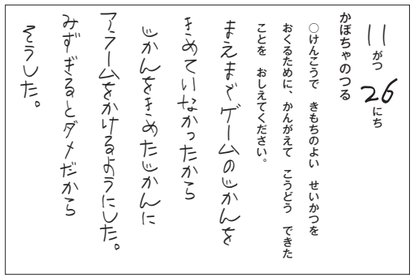
学習活動・内容	○指導上の留意点	☆評価の視点
1．自分の生活を想起する。 ・天気のよい日は何をして遊びたいですか。	○天気のよい日には、児童が外で元気に体を動かして遊びたくなるのと、教材のかぼちゃがつるを伸ばしたくなることを重ねて考えられるようにする。	
2．教材「かぼちゃのつる」を読んで話し合う。		
・つるをぐんぐん伸ばしていくかぼちゃは、どんな気持ちでいるのでしょうか。	○周りのことをあまり考えずに、自分がしたいことを夢中になってしているときの気持ちを考えられるようにする。	
・みんなに注意をされているとき、どんなことを思っているのでしょうか。	○自分の気持ちを抑えられず、人の話に耳を傾けられないときの気持ちや考えについて話し合えるようにする。	
・トラックにひかれてつるが切られてしまったとき、どんなことを考えたのでしょうか。	○どうして痛い目に遭ってしまったのか、その要因について、多面的・多角的に考えられるようにする。	☆かぼちゃに自分を重ね、わがままがどのような迷惑や失敗につながるのかを考えている。
・かぼちゃに、どうすればよかったのかを教えてあげましょう。	○かぼちゃのこれまでの気持ちや考えを客観的に捉え、どうすればこのような事故を防ぐことができたのかを考えられるようにする。	☆事故に遭わないようにするためには、どんなことに気を付ければよいかを考えている。
3．自分の生活を振り返り、自己を見つめる。 ・健康で安全な生活をするために、よく考えて行動したときのことを教えてください。	○わがままをしないで生活できたことをワークシートに書くことで、具体的に振り返えられるようにする。	☆わがままをしない生活が自分にとって健康で安全な生活に結び付くことを考えている。

▶活動時の資料

●板書の工夫

●児童のワークシート





▶本時における評価の視点（安全教育に関連のある事項）

・かぼちゃに自分を重ね、わがままがどのような迷惑や失敗につながるのかを考えている。
・わがままをしない生活が自分にとって健康で安全な生活に結び付くことを考えている。

準備物、留意事項など

・かぼちゃ、みつばち、ちょうちょ、すいか、こいぬ、トラックの絵